

京大人文研

共同研究班が読み解く

世界史

第1次大戦から100年

久保 昭博

フランス文学・文学理論



くぼあきひろ 1976年生まれ、関西学院大学文学部教授。著書に『戦争の傷―阪神大震災とモロコシ』『地下鉄のサシ』など。

第一次世界大戦は、「書」をめぐって生じていた地獄交戦があらわになった出来事であった。ここではフランスの事情に限って話をしよう。戦場に從事した当事者たちによる記録を主軸に生み出した戦争それが大戦である。兵士たちは戦場で手紙や日記を書いて自らの生活を記録した。また「戦場新聞」と呼ばれる新聞が最前線を含む各地の戦場を駆け回り、兵士たちが時にユーモアを交えて、時に戦意を高揚させる目的で、そしておそろくは絶えず苦痛と恐怖に向き合いながら戦場の様子を書き伝えた。そもそも耐久戦となった大戦では、戦場も移動も同様、待つことも重要な任務であった。演習や奇襲、あるいは影射を施す、レンチアート、の制作などなど、無聊をかきつ兵士たちを慰めたのが、戦中、そして戦後まであった。

書



戦場で手紙を書く兵士(場所は不明)＝Photo Netherlands Nationaal Archief

は、戦争が長期化し、数多くの人々を動員されたという事情があるのは言うまでもない。しかし戦争は、農民や労働者も少なからなかった兵士たちのあいだに読み書き能力が普及していなければならぬ。その条件を整えたのが、第三共和政下で推進された初等教育拡充を主眼とする教育改革である。この結果、教育は全国に根付き、世紀転換期には識字率が95%にまで達したのである。

五つにはならないが、この改革が、学校を国民統合と愛国主義的イデオロギーの装置として位置づけていた点である。たとえば、教世代にわたって読み継がれた二人の子どものフランス巡歴(初版一八七七年)という小学生用の副読本には、フランスの統一性が強調され、祖国を守る「防衛戦争」の美徳が訴えられている。こうした理想は、大戦中に「野蠻国ドイツから攻撃された我々フランス人は、共和国と文明を守るための戦争を遂行する」という紋切り型となって流通することになった。教育は、人々に戦争を受け入れさせる素地をもち出したのである。

経験から発する言葉、「証言」に

- 1914 第一次世界大戦勃発
- 1916 ヴェルダンへの戦い。西部戦線の悲惨を象徴する戦闘となる(2~12月)
- 1916 アンリ・バルビュス「砲火」刊行。年末にゴンクール賞を受賞
- 1918 休戦協定が結ばれる
- 1929 ジャン・ノルトン・クリュ「証言者たち」刊行。300点に上る戦争の記録を検討し、証言的価値という観点から批評したアンソロジー

だが戦場の現実、懐念の戦争とはほど遠いものであった。それゆえ一九一四年夏以降、戦争について書くことをめぐっては、理念と現実がせめぎあうようになり、特に戦場の経験から発せられた多くの言葉は、戦争の紋切り型を内側から崩壊させた。眼用だらけの稚拙な手紙から復讐作家の文学作品にいたるさまさまの書き物が示しているのは、死を前にした悲愴や絶望、狂気すれすれの恐怖、上官に対する憎しみ、兵士同士の連帯意識、あるいは極限状態において再発見された生の喜びや宗教的感情など、きわめて複雑な生の諸相である。「普通の」人々の経験はこのようにして巨大な文書の集合体を形成し、「証言」というジャンルを生み出した。それは歴史叙述や文学を羨望しながら、戦争をいかに記憶するかという問いを今なお突きつけている。

次回回は2月21日に掲載予定です。

せめぎあう理念と現実

戦場が生活空間と化し、そこに独自の文字文化が生まれた背景が



戦場で形成された文字文化は、文学にも影響を与えずにはおかなかった。その最初にして典型的なあらわれが、バルビュスの記録的小説「砲火」(1916年)である。これは下層

階級出身の兵士たちが口にする俗語や隠語を大皿に取り入れることで、戦中から戦後にかけての小説の文体にも影響を与えた作品だ。その十数年後に発表されたセリーヌの自伝的小説「夜の果てへの旅」(1932年)は、この文体を一人称で戦争経験を物語る語り手の

言葉にも適用し、作者の分身である語り手(主人公)の狂気を内面から描き出した。これらの作品は、規範的な書記文化を担う社会階級への異議申し立てとして、階級闘争的な意味合いとともに受け取られることもある。

文学にも影響